

氏 名	レオナルディ アンドレア LEONARDI, Andrea
学位の種類	博士（文 学）
学位記番号	文 博 第 303 号
学位授与の日付	平成 17 年 1 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	Openness and Alterity: A Comparative Study of Nishida's and Heidegger's Philosophy (開示性と他性—西田哲学とハイデッガー哲学の比較研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 伊 藤 邦 武 教 授 氣 多 雅 子 助教授 出 口 康 夫

論 文 内 容 の 要 旨

20世紀の哲学界にかんして、それ以前の思想と区別される特徴を挙げるとすれば、まず第一に、すべての真理が自然科学によって解明されるという、いわゆる「自然主義」の台頭ということをあげることができる。20世紀に新たに主流となったこの自然主義の潮流にたいしては、当然のことながら、哲学的にナイーブであり根拠が薄弱であるという批判が提出されたわけであるが、多くの批判はそれ自身が古い伝統に依拠して、20世紀以前の西洋近代的な世界観に盲目的に従った、非反省的なものであった。しかし、一方で、近代的世界観に根本的な批判をつきつけることで、同時に自然主義の独断性を批判するような、真に独創的な哲学的思想の創出も生じたのであり、そうした独創的な反自然主義的哲学者の代表として、西田幾多郎とマルティン・ハイデッガーの名前を挙げることができる。本論文は、これら二人の哲学の比較を通じて、その思想の出発点と目標に強い類似性が認められるだけでなく、それぞれの前期思想から後期思想への変遷の経緯にも共通点があることを確認しようとする研究である。二人の哲学の共通点や相違にかんしては、これまでもいくつかの研究がなされてきたが、本論の特徴は、この前期から後期への変遷の論理の並行関係の内実を具体的に明らかにする点にある。本論はこの二人の反自然主義的企ての発展の軌跡に見られる共通性を確認したうえで、最終的にこれら二人の哲学の相違点も確認し、そこに西洋思想と東洋思想の伝統にもとづく相違を見るときともに、そうした相違への新たな取り組みの必要を考察しようとする。論文全体は五章に分かれているが、その構成は、二人の哲学者の思想の前期、後期にそれぞれ一章を当て、最後に第5章で、最終的な比較検討を行い、結論において総括を行うという形式を採っている。その概要は以下の通りである（論文は全体が英語で書かれているが、ここでは各章の表題や術語など、すべて日本語で表記する）。

第1章は、「西田：絶対主観の形而上学」と題され、西田の前期哲学の主題とその限界とが論じられる。前期の西田は純粹経験を根本的素材とする存在論を考案したが、その存在論の体系化の過程で、絶対主観の純粹作用というものを全存在の基礎にすえ、その結果として、本来重視するはずであった具体的経験の意味を失うことになった。『善の研究』における経験の世界は、「主客合一」の経験によって構成されているとされるが、実際には「神」と呼ばれる絶対主観によって、その主観の自覚のために映された影の世界にすぎないものになっている。われわれの経験する現象は、個人の根本的経験に与えられたものであるにもかかわらず、その究極的な本性は、絶対主観がわれわれの個人的意識に映し出した空しい映像にすぎないのである。また、西田は『自覚に於ける直観と反省』において、経験において働く意識の作用の分析を洗練し、実在の根本的な遂行形式としての自覚の弁証法的構造への理解を深めていくが、いまだ主観主義的観念論の傾向を引きずっており、世界における個物の形而上学的位置というものを認めることもできなかった。こうした理論上の制限への反省が、西田の哲学に大きな転換をもたらす契機となった、というのが本章の結論である。

次に第2章は、「西田：場所の論理と相互射影の形而上学」と題され、西田の後期思想における前期思想の克服の道が辿られる。後期の西田は「無の場所」という概念によって、意識を開いた場所として解釈するようになり、無であるからこそそこにおいてあらわれる現象がそれ自体の有をもち、独立した物として考えられるような論理を展開するようになった。た

だし、場所の論理の最初の段階においては、個人的意識の独立性や事物の具体的な個性について十分な考察に至っておらず、場所が「自己の中に自己を映す」という事態も、絶対主観のような場所が一方的に客観的な映像を生み出すという性格を残していた。この限界が乗り越えられ、場所の自己射影という働きのもつ対称的性格が明らかにされて、映されたものも場所であるがゆえに、映すものと対称的な存在者であることが明確化されるようになったのは、『私と汝』という論文以降のことである。この時期以降の西田の哲学においては、実在は絶対主観にたいする相対的客観であるわけではなく、個物としての無数の主観が相互に客観的に映しあい、相互に限定しあう構造をもつものとされるようになった。絶対無の場所における自己射影とは、絶対無が自己によって自己を否定すること、つまり矛盾的な自己同一という弁証法的な運動であり、この弁証法を通じて一般者たる絶対者は自己を否定し、無数の個において自己を限定するという、実在の構造が最終的に明らかになったのである。

第3章は、「ハイデッガー：道具性の存在論と経験の時間的な閉塞」と題され、ハイデッガーの前期思想の主題とその限界が論じられる。前期ハイデッガーは、存在一般の意味を現存在の開けということから理解する。現存在の実存は円形的な時間性の運動のうちにあり、自分の最終的存在可能である「死」と直面し、その自己関連性の中で自分の実存の場として開かれた世界において、世界内部存在である事物に出会う。しかし、それらの事物の存在の意味は、現存在が自己の将来にかんして投企する意味の網目に吸収されて、単なる「道具」と見なされ、決して他者との出会いという形では出会われない。この他者との出会いの不可能性の原因の一つは、空間性の時間性への還元にある。「自己の外に在るもの」としての他者との出会いは、その「外」としての空間性の確保を要求するが、『存在と時間』の地平においては、空間は時間の時熟から派生する二次的な属性にすぎないものとなり、それ自身の独立の存在を認められることがない。ここから、前期ハイデッガーにおいては、現存在（人間）における他者としての他人や自然との出会いが不可能になっており、それがこの存在論の不十分さの核心をなしている、というのがこの章の結論である。

次に第4章は、「ハイデッガー：物の存在論と経験の空間的な開示」と題され、ハイデッガーの後期思想における前期思想の克服の道が辿られる。後期のハイデッガーは、分析の中心を人間の現存在から存在自体へと移行させる。経験において出会われる「物」の存在の意味は、典型的には芸術作品の現出において理解される。物には人間の理解に適う側面とそれを拒否する面があり、経験は物の現れと隠れ（伏蔵性）との対立によって生じるのであるが、このことは、芸術作品の存在論的分析においては、「地」という概念によって表され、晩年の思想においては、天と地、人と神からなる「四方」という概念によって表現される。これらの分析において、物の有り様はもはや『存在と時間』における「道具的なもの」ではなく、「生起」のうちにあるものという性格を帯びることになる。このような概念を通じて、ハイデッガーは他性としての物の存在を確保するようになったわけであるが、こうした他性との出会いの理解は前期の時間性優位の存在論を捨てて、空間性の根本的な役割を認めるようになったことで可能になったと考えられる。空間の開けの構造に従って、経験のうちに現れる物には、われわれに向かう面と逆らう面をもつことになるが、こうした物による否定こそが、存在の生起の神秘を守るモーメントであるというのが、後期ハイデッガーの思想の核心となったのである。

最後に第5章は、「西田とハイデッガー：分岐する道」と題され、それまでの四章にわたる分析によって明らかになった西田とハイデッガーの哲学の根本的特徴を総括したうえで、その共通点を再確認する同時に、その根本的な相違点が指摘される。第4章までの分析から明らかになったように、西田哲学とハイデッガー哲学の発展は、同様の問題点を出発点とし、同様の解決へと向かった並行的な思索の道として理解することができる。二人の思想家はともにその前期においては、経験の内容を主体（主観、現存在）に還元したのにたいして、後期においては、他者なる対象との関係としての経験の開かれた構造を明らかにする方向に向かった。それは開示性としての空間性の重視への道であり、他者の他性を経験の主体には還元不可能な次元に位置付けようとする試みの道であった。しかしながら、二人の思想にはこのような本質的な類似性が認められる一方で、その他者の理解と開示性の構造の解釈にかんする根本的な相違が存在することも、以上のような比較研究を通じて確認されているとも考えられる。というのも、西田哲学において他なる対象の典型的なあり方は「汝」であり、その汝もまた形而上学的にはもう一人の私であるとすれば、そこにはいかなる神秘も存在しない。西田においては、場所の自己限定という実在の運動において、それぞれの個が個になりきるために、その背後には何も残されることがないのである。これにたいして、ハイデッガーにおいては、現れる物の背後に潜んでいる他性の根拠は、人間の主観性や主体性とはまったく異

なった神秘的な存在の起源である。ハイデッガー哲学にとっては、人間と物とがその中において存在する「開け」、すなわち開示性は、それ自体の生起の原因を人間の方から理解することのできない不思議な出来事なのであり、その開けの中で人間が物と出会う理由もまた、人間の理解を超えた謎として留まっているのである。

論文末の結論「無と伏蔵性」においては、改めて、今日における西洋と東洋の思想の対話の必要性が確認される。西田とハイデッガーの哲学の比較については、これまで主として西田の流れを汲む思想家たちによって行われ、そこでの解釈の主流は、西田の側により徹底した西洋哲学の超克の可能性を見出すというものであった。しかしながら、以上のような分析から明らかになったことは、西田とハイデッガーの間に見られる、これまで指摘されてきた以上に緊密な類似性であるとともに、その類似した問題意識のもとでの最終的な「分岐」ということである。しかも、これらの二つの哲学の分岐については、それを西洋哲学の超克という観点からだけでは開明できない側面があることが判明した。というのも、これらの思想家において食い違うのは、他性の開けの本性とその構造にかんしてであり、この問題はあくまでも形而上学の方付けにかんする根本的な理論対立として理解されるべきものであるからである。問題は西洋と東洋の思惟の伝統の優劣ではない。現代における問題はむしろ、自然主義ないし科学主義が盲目的に追認されているこの時代において、形而上学がいかなる批判的な視点を提供できるかという点にあり、その追求のためにはこれまで以上に東洋と西洋の一切の形而上学の可能性が再考され、あらゆる角度から試されるべきである、というのが本論の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀の哲学の一つの潮流としての「反自然主義」という観点から、その代表的な思想家として西田幾多郎とマルティン・ハイデッガーを取り上げ、その哲学の類似性と相違点を論じたものである。ここでいう反自然主義とは、あらゆる真理が自然科学によって解明可能であると主張する「自然主義」に反対して、人間存在の本質的特徴は科学によっては捉えられず、形而上学的な分析によって別の仕方では理解される必要があると考える立場である。論者は本論において、西田とハイデッガーの哲学が、その思想の出発点においてこの反自然主義の立場からする哲学体系の構築という動機を共有していたばかりではなく、その思想の展開の過程にかんしても、前期の思想から後期の思想への転換の方向を共有するという、根本的な類似性が存在することに注目する。そして、このような類似性をもちながらも、これら二つの哲学の最終的な結論に大きな相違が存在する点にも注目して、そこに20世紀の形而上学のいくつかの類型を認めると同時に、こうした事実をもとに今後の形而上学の方の可能性を探る糸口を見出そうとする。本論は基本的に西田とハイデッガー哲学の比較研究であるが、その比較を通して形而上学の可能性についての思索を行おうとしたところに特徴がある。本論の内容にかんしてとくに評価すべきであると考えられる点を列挙すれば、以下の通りである。

一、西田とハイデッガーは20世紀の日独を代表する哲学者であるから、その比較については多くの先行研究がなされていると想像されがちであるが、実際にはその数は驚く程少ない。というのも、西田の流れを汲む京都学派の思想家たちとハイデッガーとの間には緊密な交渉があったが、その師にあたる西田自身とハイデッガーとの間には、具体的な思想的交渉というべきものがほとんどなかったからである。本論の論者はそれにもかかわらず、この二人の思想家の間に思想の根本的動機と思想展開の双方にかんして、著しい類似点があったことを指摘するのであるが、とくに、反自然主義に立ちつつ観念論的傾向をもった前期から、他者への開示性を中心テーマとする後期思想への展開、という具体的な問題意識に即してこの点を解明しようとした点が、本論のもっとも独創的なところである。

二、西田とハイデッガーの後期の思想が、ともに「他者」への開示性をテーマにしていた点で共通の軌跡を示したというこの指摘は、これまでほとんどなされなかったという意味で、貴重な指摘であるが、とくに20世紀後半のヨーロッパ哲学の中心的主題のひとつがこのテーマであったことを考えると、このような指摘は彼らの思想的営みの先駆性を証明すると同時に、ハイデッガーや西田が20世紀前半を代表する思想家であったという事実の再解釈ということにも通じる。この点でも、本論の比較研究は重要な洞察をもたらしている。

三、論者は、このように二人の思想の共通点を指摘する一方で、この他者への開示性の構造にかんして、二人の思想の間には決定的な相違があったという点にも注目する。すなわち、西田においては他者とは何よりももう一人の「我」を意味するのにならして、ハイデッガーでは他者は世界の開けにおいて出会われる「物」を意味する。他者との出会いにかんしてこ

のような相違が存することは、この開かれの構造にかんしても大きな相違をもたらすと論者はいう。すなわち、西田においては、我と汝の邂逅における他者の背後には何もかも隠されていないのにたいして、ハイデッガーにおいては、世界の内なる他者の現れは同時に世界の隠れでもあるという、二重の構造をとる性格の事態であるとされる。他者の現れにかんするこの対比はそれ自身興味深い対比であって、今日の他者論の方向を考えるうえで、二人の思想が今なお参考になることを、具体的に示したことになる。すなわち、他者理解における理解の透明性の問題が、今日の形而上学、存在論の企てにおいて避けては通りえない根本的な要件であることを、本論は明らかにしているのである。

このように、本論はすでになされていて当然と思われる西田とハイデッガーの哲学の比較研究というテーマについて、始めて本格的な分析を行ったという点に大きな価値があり、しかもその分析を通じて現代哲学の重要なテーマについて掘り下げて考えるためのヒントを提示しているというところにも、大きな意味がある。ただし、いくつかの点ではなお不十分な点も見受けられる。たとえば、論者は初期西田の思想における「神」概念を、伝統的な西洋の形而上学の文脈に密着させて理解しようとしているが、このような理解は、あえて西洋哲学の術語によって思想を表現しようとした西田の複雑な思考のスタイルを、不等に単純化しているのではないか、という疑問が残る。また、西田の思想と西洋の神秘主義との間に見られる強い類似性を指摘しながら、一方でその思想の由来を東洋思想と直結させようとする記述などにおいては、類型化された西洋、東洋概念からする混乱が残っていると思われ、より柔軟かつ反省的な思想史の理解が必要であることを感じさせる。これらの点については論者の今後の研究の深化によって、より厳密な解釈が提示されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年9月29日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。